

# 絵カード文学療法(Literary therapy)プログラムが EBD 青少年の ADHD 症状の軽減に及ぼす効果に関する研究

SST 基盤文学療法(Literary therapy)プログラムを中心として

○落合俊郎, KIM Younghan, LEE Hyoshin, KIM Sungbum, KIM Darae, KWON Soojung, PARK Jungmin, LEE Jinok  
(大和大学 教育学部) (韓国 大邱大学校 師範大学 特殊教育科)

KEY WORDS: 絵カード, ADHD, 文学療法

## (目的)

ADHD 青少年のソーシャル・スキル・トレーニングは、青少年が成長とともに自然に獲得できることではなく、保護者と教員、友人との社会的支持の環境と専門家のアプローチなどが必要であると考えられる。従って、EBD(Emotional and behavioral difficulties :以下 EBD とする)の青少年が注意力欠如, 多動性, 不注意—衝動性を軽減し社会適応に必要なスキルを獲得できるように、必要かつ即時に行える訓練とプログラムを構成・構築することが重要である。

本研究は、EBD 生徒の注意力欠如, 多動性, 不注意—衝動性を軽減するために絵カードを使った SST 基盤文学療法(Literary therapy)プログラムの開発とその効果の検証を目的とした。

## (方法)

本研究の調査対象は、韓国 D 市にある A 高校、6 クラスの ADHD 症状が疑われる 17 名の生徒である。選定された 17 名の生徒を、それぞれ 8 名と 9 名をランダムで選定し、プログラム実施集団と非実施集団とした。両集団の事前—事後—その後の効果を確認した。実施集団には文学治療プログラムを実施し、非実施集団には何のアプローチも提供していなかった。本研究では、プログラムに参加する生徒の ADHD を評価するために Conners Teacher Rating Scale を使用した。絵カードを使った EBD 生徒の ADHD 症状軽減プログラムは、毎回 40 分、10 回実施した。絵カードは、学生の集中力と認知のため、Y-STORY で開発された talk 絵カードを使用した。絵カード文学療法プログラムの効果が有効であるかを検証するため、絵カード文学療法プログラムに参加したか否かを独立変数とし、ADHD 変化量を従属変数とし One-way ANOVA を実施した。

本研究の実施について、大邱大学校師範大学研究倫理条項に則り、研究倫理委員会の承認を得た。対象者ならびに保護者に対し、氏名、データについては、アルファベット、数値で表記し、一切の不利益が生じないよう細心の配慮をした。得られた資料に対しては本研究以外に使用しない旨を文書に明示し、合意の上、研究を行った。

## (結果)

絵カードを使用した SST 基盤文学療法プログラムを実施した集団の事前—事後 ADHD 症状変化の平均値は -13.13(3.98)であり、非実施集団の事前—事後 ADHD 症状変化の平均値は -4.44(3.78)であった。

プログラム	事前測定	事後測定	変化量
実施集団	62.25(4.30)	49.13(5.25)	-13.13(3.98)
非実施集団	57.67(6.42)	57.22(7.46)	-4.44(3.78)

	平均和	自由度	平均平方	F値	有意確率
プログラム実施状況	681.020	1	681.020	45.382	.000***
誤差	225.097	15	15.006		
全体	906.118	16			
***有意確率<.001					

事前—事後 ADHD 症状変化量に関する分散分析の結果を表 2 に示す。絵カードを使用した SST 基盤文学療法プログラム実施による事前—事後 ADHD 症状変化に有意差が見られた。つまり、絵カードを使用した SST 基盤文学療法プログラムは対象生徒の ADHD 症状を軽減する効果があると言える。言い換えると、絵カードを使用した SST 基盤文学療法プログラムは、EBD のある生徒の注意力欠如, 多動性, 不注意—衝動性を軽減させることができると考えられる。

表3 事前—事後の ADHD 症状変化の平均及び標準偏差

プログラム	事前測定	事後測定	変化量
実施集団	62.25(4.30)	55.75(6.02)	-6.50(2.56)
非実施集団	57.67(6.42)	55.11(8.12)	-2.56(4.85)

	平均和	自由度	平均平方	F値	有意確率
プログラム実施状況	65.895	1	65.895	4.220	.058
誤差	234.222	15	15.615		
全体	300.118	16			
***有意確率>.05					

## (考察)

絵カード文学療法プログラムを提供された参加集団の EBD 生徒は、プログラムを提供されなかった非参加集団の EBD 生徒に比べて注意力欠如, 多動性, 不注意—衝動性軽減程度に統計的に有意差があった。また、生徒の ADHD 下位領域四つの中で多動性と不注意—衝動性, 多動性指数の三つの領域において、二つの集団の間に変化量に有意差が見られた。しかし、その効果の持続性については統計的な有意差が見られなかった。絵カード文学療法プログラムに参加した集団は、プログラムに参加していない集団に比べて EBD 生徒の注意力欠乏, 多動性, 不注意—衝動性減少効果が有意であることが分かった。

## (文献)

Smith, B. H., Barkley, R. A., & Shapiro, C. J. (2006). Attention-deficit/hyperactivity disorder. In E. J. Mash & R. A. Barkley, *Treatment of Childhood Disorders* (3rd ed., pp. 65-136). New York: Guilford Press.  
(Ochiai Toshiro, KIM Younghan, LEE Hyoshin, KIM Sungbum, KIM Darae, KWON Soojung, PARK Jungmin, LEE Jinok)